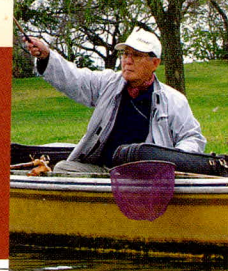


●今月の表紙●

今月の表紙は、「野釣りパンザイ」で活躍中、抜群なカーボンの穂先・穂持を提供している慧月（すいげつ）工房の神保亮一さん。釣りの技も抜群だ。晩秋の横根根川にて。



特集 この秋、日本屈指の岡釣り天国を見直そう!!
長島新堀、西部与田浦、与田浦水道、常陸利根川、黒部川

8 佐原向地 Part II

特集 II 杉山達也[SPLASH BEAT II] & 岡田 清[Deep Side Angle]

177 シマノジャパンカップ2003

124 マルキュークラブ対抗選手権大会 決勝戦

126 がまかつチーム対抗戦 東日本大会

128 ペアへら鮎釣り大会 上州屋&VARIVAS cup

186 Neoヘラインビテーションル 【第4戦】三島湖

- 野の風景**
- 4 六軒川・八間川(千葉県印西市)
 - 6 備前川(茨城県土浦市)
 - 18 名手・石井旭舟がいく、へら鮎出合い旅… へらぶな浪漫街道
《第十二回》埼玉県・宮沢湖
 - 26 スーパーアングラー小池忠教のエサ合わせ大全
《Vol.12》千代田湖で浅草へら鮎会の試釣&例会
 - 34 大型狙いの楽釣宣言! 山内研作&生井澤 聡
《最終回》総集編
 - 42 棚網 久の対決mode 1, 2, 3!
《Battle.32》スーパーバトル in 筑波白水湖
高橋道雄、遅沢 明、中島 上、河村大輔、上田友宏、安田克巳
 - 118 頑固一徹! 自分の釣りを貫き通す男
《今月の釣り人》釣れても釣れなくても自然任せ!? 近藤 裕さん
 - 120 竹とともに生きる。
《第4回》「浮草」作者 山田 優
 - 130 田辺哲男の「それってどーゆーことよ!?!」
《Vol.12》スーパーヘラマンへの道、中間テスト! 椎の木湖フライデーオープンに挑む。
 - 134 熱血釣り女・吉川ひとみがいっく!「へらってヤバイわっ!!」
《第18回》ひとピー、ミニ賞金大会に挑戦!! 加須吉沼
 - 138 列島縦断 旅するカメラ
《千葉県最終回》御宿町付近 白木のセキほか
 - 142 西日本川釣り紀行 北川穂積
《第12回》千町川(岡山県)
 - 191 **株オーナーばり へらテスター懇親釣り大会 三川FP**
 - 192 フィッシングレディ
《今月のレディ》石本久美子さん 神扇池(埼玉県幸手市)

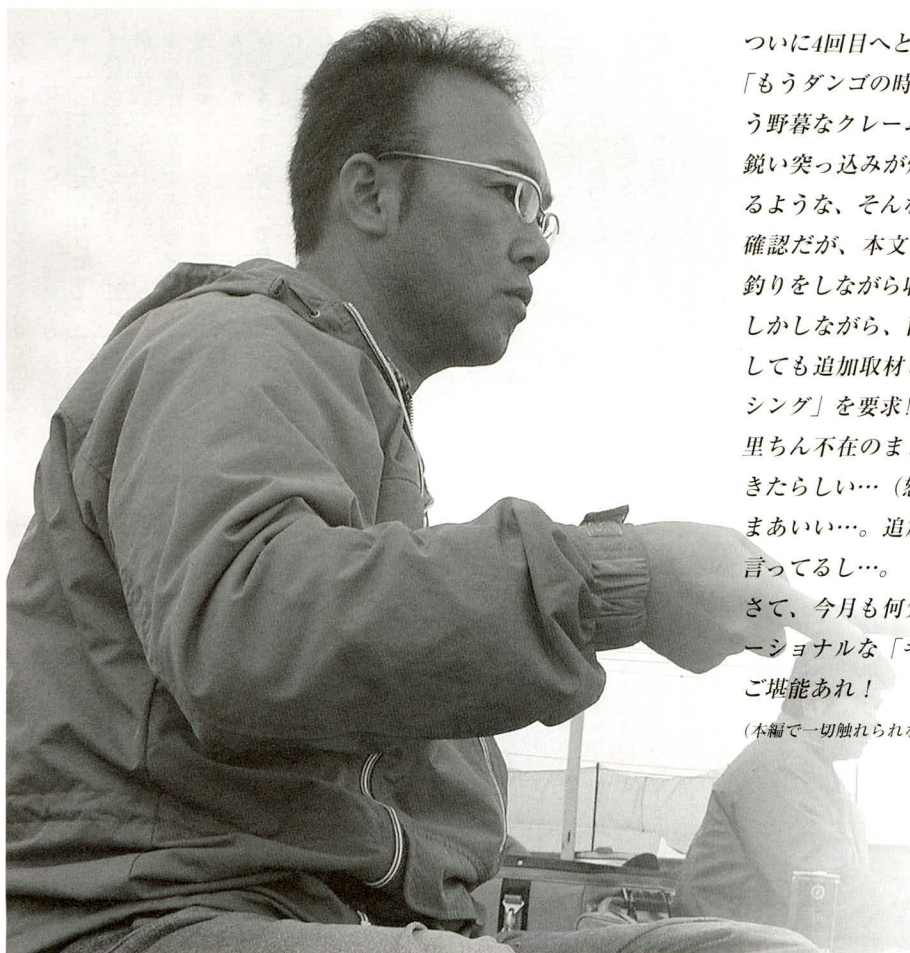
50 電話で突撃!! 関東近辺釣り場情報

- ★エリアレポート**
- 52 佐賀工業団地の池(佐賀県) 河口正伸
 - 54 赤祖父湖(富山県) 山本一朗
 - 55 甲南へらの池(滋賀県) 前田誠志
 - 56 朝日池(岐阜県) 後藤 誠
 - 58 あらいしのぶの始めてみようよ、へら鮎釣り♡
《第8回》へら鮎釣りのハリって、どんなの♡♡♡
 - 60 ガッツ小林が攻めまくる 若さとファイトの激釣記
《最終回》隼人大池(埼玉県)
 - 66 人間カーナビ稲毛利夫の実釣!野べら釣り歩き
《最終回》嶺公園の池(群馬県前橋市)ほか
 - 70 **NHCスピリット**
《Vol.3》静野圭一 in 羽生吉沼
 - 75 江成公隆のトーナメント、復活への道。
《Vol.18》~【田釣り両ダンゴ】復活への道!~ 伊藤洋一の鳥籠④ in 精進湖(滋賀県羽生市)
 - 82 GOZYUKKAMI TREASURE HUNTER アマヤン 天野正由
《最終回》いつかどこかで50上 みのわだ湖&妙義湖
 - 86 水辺のプラネタリウム 吉本亜土
《今月の星空》「豊英湖苦戦」
 - 91 元気が出るへら鮎 西田美明
《第12回》「裏方さんが競技する」の巻
 - 94 最狂ヘラ戦士養成所“鮎の穴” 高橋謙司
《第十一話》緊急報道SP【タカハシ、ナイター中に溺れる!事件を検証する!】
 - 98 本誌イケイケ編集長が斬る! 業界のタブーに迫る!!
《第10回》【どうしたらインストラクターになれるのか?】続編
御大・石井旭舟に直撃!④(完結)
 - 102 野田幸手園新聞
 - 104 ワクワク管理釣り場情報
 - 108 小売店情報
 - 146 **フォーカス懇親釣り大会 佐屋川温泉前寄せ場**
 - 147 **平成15年度 全放協・日研 放流日程表**
 - 149 竹、合成竿を使用した 未開の釣り場 釣行記
《その20》鹿の川沼(群馬県笠懸町)
 - 156 **マルキュー日韓へら鮎釣交流会 隼人大池**
 - 158 **ダイワ新製品「飛燕峰・烈火」試釣会 羽生吉沼**
 - ★へら鮎BOX**
 - 161 里ちゃんの新米編集長雑記
 - 162 情報地獄三三
 - 164 ボイス
 - 170 新人モロちゃん奮闘記
 - 171 プレゼント発表
 - 172 釣果予想クイズ
 - 175 広告索引
 - 176 編集後記

この物語は、
栄光、そして挫折を味わい、
今、再び這い上がろうとする一人の男の人間ドラマである。

江成公隆の トーナメント、 復活への道。

text and photo by Kimitaka Enari and Satoshi Tanaka
業界初、Web運動企画！ (URL) <http://hesar.yokohamatsurumi.net>



〈Vol.18〉

～【宙釣り両ダンゴ】復活への道！～

伊藤洋一の常識④

in 精進湖 (s西湖&三島湖&羽生吉沼!?)

ついに4回目へと突入してしまった「伊藤洋一の常識」。「もうダンゴの時期終わっちゃうじゃねえか～」などという野暮なクレームは置いてくとして(!?)、今月も江成の鋭い突っ込みが炸裂。伊藤洋一の「凄み」が滲み出てくるような、そんなインタビューになっていると思う。確認だが、本文は全て初回の取材場所である精進湖で、釣りをしながら収録されたものだ。

しかしながら、西湖、三島湖に続き、江成アニキはまたしても追加取材と称した「伊藤洋一とエンジョイフィッシング」を要求!?

里ちん不在のまま、二人で思う存分羽生吉沼を堪能してきたらしい…(怒)。

まあいい…。追加取材で得たものは、来月号で書くて言ってるし…。

さて、今月も何気ない会話の中に、実はとってもセンセーショナルな「キモ」が暴露されちゃったりしている。

ご堪能あれ!

(本編で一切触れられない羽生吉沼の模様は、フォトレポートでどうぞ…)

by 里ちん

伊…江成君がウキを作った時、俺らの釣りをイメージしたって言ってたけど、どんなイメージだったの？

江…何て表現したらいいんでしょうか…「止まるウキ」っていうんでしょうか。

伊…「止まる」？ 止まっちゃうマズいんじゃないの(笑)。「入り込みがゆっくり」って言いたいんでしょう？

江…そうですね。じゃあ、「アたるウキ」って感じですかねえ。

伊…今度は言い過ぎ(笑)。それじゃ「魔法のウキ」みたいだよ。入り込みがゆっくりな結果として受けやすいとか、アタリやすいとかっていうのならわかるけどさ。

江…詳しい事は分らないんですけど、ウキの素材によって全然ウキの動きって違いますよね。同じ体積のウキがあったとして、浮力もたいして違わなかったとしても、素材が違うと動きがまるで違うと思うんです。ちなみに僕がはじめてフルセットで揃えたウキって、ある有名なウキ師さんのものだったんですよ。羽根の一本取りで、足まで羽根のオールビークックってやつですね。あつ、「オールビークック」は、たしか碧舟さんの登録商標でしたから、軽はずみに使っちゃいけないでしたね。僕が買ったのは碧舟さんではないんです(笑)。最初は何も感じずに使っていたんですけど、ある日僕が小さかった頃の近所のお兄ちゃんと再会しまして(笑)、カヤウキを作ってもらうようになったんですよ。まあ綺麗なウキでしたねえ。昔っから手先が器用で、何でも作っちゃうんですよ。最近では会ってないですけどね。で、使ってみたら動きがまるで違う(笑)。これにはびっくりしましたね。

伊…ふーん。江成君はカヤウキを使ってたのかあ。江成君の「ナジませるスタイル」ってのが、一段と理解出来たよ。

江…一般的に言われている事として、カヤウキは「入り込みが速い」ウキだからって事ですよな。

伊…そう。作者によっても違うんだろうけどね。

とまるウキつ、アたるウキ?

でも10年ぐらい前だと、「入り込みの良さ」ってのが「いいウキ」の条件みたいに言われていたよね。俺なんか当時は「何だよソレ！」って思ったんだけど、管理釣り場では多よりうんと濃かった時代だったからね。一般的には結果として釣りやすかったのかも知れないね、悔しいけど(笑)。「ナジませ釣り」については、さっきさんざん喋ったからあまり喋らないけど、「入り込みのいいウキ」が「良いウキ」だとはやっぱり思えないんだよ。あくまでも「時代に合ってた」ウキなんだと思うんだ。

江：まあ、カヤウキはあまり一般的ではなかったんで、羽根ウキで言えばなで肩の合わせウキなんかもそうですよ。みんな競って買い求めていたと思います。だから肩の張った一本取りを作るウキさんにとっては、辛い時代だったのかも知れませんね。人によってだとは思いますが。

伊：釣り方を限定したウキや、開発コンセプトをキッチリ打ち出すウキさんが増えたよね、この頃から。そうでもないし生き残りない厳しい時代のようになってきたんだと思うよ。この10年で釣りのレベルは間違いなくどんどん上がっているから、見る目も厳しいんだよね。釣り場で質問されても感じるもの。昔はエサのブランドを聞く人しかいなかったから(笑)。ところで、カヤウキで有名なウキって少ないけど、江成君の使ってたウキって俺の知ってる人のかな？

江：どうでしょう？ 岡田 清君が使ってたウキ3回獲ってますからね。知る人ぞ知るところなんじゃないか。

伊：知ってるよ！ 「本多作」でしょ？ ところで丁寧な仕事してるよね。俺、感心してたんだ。それにしてもG杯3回ってのは凄いよ。Fで言え、さしずめコンストラクターズチャンピオンだもんね。アマチュアのウキとしてはもの凄く快挙だよ。本人も喜んでたでしょう。

江：そりゃそうですよ。僕や大竹君はそこまでの事はしてあげられませんでしたけどね(笑)。

伊：なんだ、大竹君も使ってたの。うーん、「当時の謎は全て解けた！」ヨ。

江：アハハ。僕らも当時、伊藤さん達の釣りが全然イメージ出来ていなかったわけじゃないです。そこへもってきてウキだけマネしたって無理があるんですよ。最初に買った「オール羽根」

のウキを引っ張り出してきて徐々に使ってみたら、「なんじゃこりゃー！ 全然ナジんでいかねぞー」ってな感覚なわけですよ(笑)。釣りが遅くなると感じましたね。

伊：使い方だけだね。

江：分かってますよ、今は。もともと入り込みが遅いウキでドンとナジませようと思った僕が悪いんですから。

伊：そうそう(笑)。でも当時はドンと入れる釣りにやられちゃう事もあったんだよね。俺らにしてみれば正直言って「正しいと思えない釣り」の人らにやられちゃって、マジで悔しかったんだよ。俺も若かったから(笑)。でもやっぱりケースパイケースだって気付いたよね。その日その時で、自分の上を行った人達の釣りってのはさ、真撃に受け止めなくちゃいけないんだって。正解も一つじゃないって。結果が全てだもんね。

江：いや、その頃の伊藤さんともっとお話ししたくべきでした。つくづく思いまっね。そうすりゃ秋ちゃん(※秋野孝之氏)とのカッパギだっただけで、俺も若かったから(笑)。

伊：かなりやられちゃったの(笑)？

江：やられましたねえ。でもホントに、今は伊藤さん達の釣りが合ってるんだと、僕は思います。

伊：「今は」って、俺は当時も「自分の釣り」で釣ってたよ(笑)。

江：まあまあ、一般的に言ってる事です。当時ナジませ釣りを黙って受け入れていた人達の大半については、僕を含めてですけど、おそらく伊藤さん達の釣りを否定してたっていうか、出来なかつたんだと思うんですね。そういう人達にも伊藤さん達の釣りが受け入れやすい状況になってきたっていう意味ですよ。

伊：大型化で目方はのすけど、へらの口数はあきらかに減ってきているからね。5枚10枚の差で、平気で5kgくらい変わってきちゃうもんね。イタいよ。そんな時代だからさ、へらへのアピールを第一に考える釣りが求められていると思うんだけどね。アピールっていつても人間側の都合じゃなく、より自然に、より追いやすく、より食いやすくて、よりあげるってこと。へらの気持ちも「積極的」に考えていくというか。

江：そういう観点からいけば、「入り込みが遅いウキ」ってのが、もの凄くキーになってきますよ。

伊：ねえ、さっきから気になってるんだけど、その「遅い」って表現やめようよ。なんかマイナスイメージがあるんだよね。俺らにとっては「普通」なんだから(笑)。せめて「ゆっくり」にしてくれない？

江：こりゃすいませんでした(笑)。気をつけますね。で、僕はその「ゆっくり」な入り込みのウキの効果ってのがイマイチ理解出来てなかったんです。ハリス伸ばせば済む話じゃねえか」って思ってたんです。でも秋ちゃんが思い知らされました。たしか秋ちゃんが言ったのは、ナジミ込みの際に「ハリスといっしょにオモリが動いちゃう」のと「オモリがほぼ静止した状態でのハリスのみの落下」との違いって感じでした。

伊：ほお、そこまで分析してたかあ。

江：ええ。確かにどっちが自然かって言われれば、明らかに後者ですよ。ナジミ切れは最終的に当然、オモリの位置も下がって張られにくくなり、オモリの方がオモリに引っ張られにくくなるから自然落下に近いですもんね。追いやすいのも頷けます。ハリスが落下する時の「支点」じゃあないな。「中心」と言えはいいのかな、そこが動いちゃうと、そういう話ですよ。

伊：うん。もし「入り込みの速いウキ」をどうしても使いたければ、もともとはハリスを伸ばすことになってくるよね。そうすると今度はアタリを伝えられないかもしれないわけ。ナジミ際の釣りって言うのはハリスが張るかどうかというイメージなわけだからね。逆に「入り込みのゆっくりにウキ」なら、ウキでカバール出来る分、ハリスを詰める事が出来るんだよ。江成君向きでしょ(笑)。そうは言っても実際に今日なんか一人とも

「入り込みのゆっくりにウキ」でも70cm前後のハリスを使ってるわけだから、「入り込みの速いウキ」ではいけない何cmのハリスになっちゃうの？ ってね。それに、どんなにハリスを伸ばしたところで、「ハリスの自然落下が始まった後でもオモリに引っ張られる瞬間がある」というのが問題なんだよね。

江：釣り方に応じたセッティングのバランスとは、まさにこの事です。いやあ、勉強になりました。

「引っ張り」のバランス。

伊：もう少しウキの話をしようか。さっきから「ゆっくり」な入り込みって言うんだけど、そういう機能を持たせようと考えた場合、ボディ形状や材質も大事だけど、トップの役割も無視出来ないよね。なんだかんだ言ったって、釣りが見れるのはウキのトップだけだし。

江：そうですね。あのトップの動きが堪らないんですよ。いかにも魚と話をしているようなおそろくへら釣りがウキ釣りじゃなかったら、僕はここまでハマらなかったかも知れないです。だからたまにへら以外の釣りをやる時なんか、ウキ釣りじゃないと辛いですね。すぐ飽きちゃう(笑)。

伊：うーん、なんか分かるなあ。でね、ボディのことは置いてくけど、よりゆっくり入れさせようと考えた場合、ウキの頭(上部)は軽い方がいいのは分かるでしょ。だから俺はセルトップにこだわってるんだよね。長さもそう。長いとその分重くなってくるわけだから、出来るだけ短い方がいい。俺、どうせあんまりナジませないしさ(笑)。

江：伊藤さんのこだわりは知ってますよ。僕もそういう話をよく聞くんで、今日使ってるウキには短めのセルが乗ってます。でも実際どうなんですかねえ？ 量った事がないんで、別の素材のバイトトップと比べてどのくらい違うんでしょう？ 例えは、同じセルでも肉厚だったら意味ないし。

伊：そう聞かれると困る(笑)。でも動きはあきらかに違うと俺は感じるなあ。これでどう？

江：伊藤さんがそう言うなら納得です(笑)。ここで一つ質問なんですけど、極太トップでもゆっくりに入ると言われてますよね？ 以前デカダンゴが物凄く流行った時に、僕も作ったんですよ(笑)。その時はそんなたいセルが手に入らなかったのポリカーボだっただけですけど、けっこうゆっくりにナジんでくれました。伊藤さんはこういう方法で「ゆっくり」という方向を旨にする事についてはどう思われます？

伊：うん、ゆっくりなのはいいんだけど、俺にとってはトップが太いと意味がなくなっちゃうな。

サワリが殺されちゃうよ。へらの微弱な動きを読み取るには、トップはやっばり細かい方がいいと思う。この事はみんな経験で分かってもらえるとと思うんだ。で、細いんだけれどもゆっくり入って欲しいから、やっばり軽いセルってことになるんだよね。

江：となると、伊藤さんにとつては太目のトップを使うっていうケースはなさそうですね。

伊：どうして？

江：えっ？ だってナジませない伊藤さんにとつて、エサを背負うとか耐えるとかっていう部分も関係ないわけですよね？ もうトップを太くする理由がないじゃないですか？

伊：なるほどね。でも、あるんだよ。極太ってわけじゃないけどさ(笑)。

江：うん、ピンときませんねえ…。

伊：重いエサを使う時の話をしたでしょ？ 管理釣り場なんかでは太めのトップのウキを使うね。まっ、太いって言ったって普通のっていうのが、一般的に見て細くはないよって事だね(笑)。

江：すいません、やっばり全然分かりません…ナジませないのに、トップの浮力が関係あるんですか？ 背負う必要はないんじゃないかとてしたわけ…。あつ、管理ではいくらかはナジませるって言ってましたっけ…。

伊：ああそうか。分かりづらいよね、この話。なんて言えはいいかなあ、一言で言うって「引っ張りのバランス」とでも言えるかなあ。

江：「引っ張りのバランス」？

伊：うん。「受ける」っていうウキの動きはさ、入ろうとする動きと上がろうとする動きが交互に起こっている状態でしょ。じゃあその時水中のハリスはどうなっているか？ っていうのを考えてみて欲しいね。

江：ウキが入ろうとする動きは、ハリやエサの重さがかかるとはじめて起こるわけですよ。重さがかかるって事は、ハリスが張っている証拠という事になりますね。上がろうとする動きは、ハリスのテンションが取れてフリーになって、重さがかからなくなつた状態と言えます。つまり揉まれてるって事ですね。もちろんオモリごと突き上げられたり、エサが無くなつちやうってたりっていうのは別です(笑)。

伊：そう。要するにトップとエサとの引っ張り合

いの絶妙なバランスで「受け」は出てるんだと言えないかな？ もちろんへらがいいわけじゃないよ(笑)。だけどより積極的に「受け」を出させようと思つたら、こういう部分まで気を使いたいよね。ここでエサが重くなるって事は、トップがエサの引っばりに負けちゃうって事にならないかな？ バランスが崩れちゃうわけ。結果として「入っていいっちゃう」ようになったら、「エサを重くしたら失敗だった」って事になる。「追えてない」なんてさ。だけどコレ、当たり前前の判断だよ。でも、今の俺の話を聞いたらどう？ もしかすると先があるかもしれないでしょ？ もろろいってでもってわけじゃないけど。

江：うん。いやあこりやもう、究極のセツティング論ですね。エサの話ではあるけれど、一般的なエサの話の範囲をはるかに超えていますよ…。確かにエサを重くした方がいいかな？ 感じる時つてのは、それなりのへらの活性を目的にしている苦なんですよ。でも「やってみたらあんまり」ってのは数多く経験します。そのうちの何回かはきつと、このケースだったんでしょね。

伊：まあ、可能性はあるかもね。江：なんと…エサの重さとトップ径の関係には、エサの重さに耐えるって部分以外でも大事な事があったってことですね。参りました。ところで、エサ落ち目盛の位置設定について少し聞きたいんですが、伊藤さん達はかなり下の方(付け根付近)で取りますよね。ウキの浮力を最大限に引き出そうっていう狙いは分かるんですが、あれってハリを取っちゃったらボディが見えちゃいませんか？

伊：少し見えるかもしれないね。何か問題でも？

江：うん、やっばり落ち込みの動きを追う釣りなんで、せめてハリスの重さがかかっている状態(ハリなし)でも目盛で見て欲しいかな…。

伊：あーなるほどね。ま、慣れなただけど、確かにあんまりウキの肩が出ちゃうようじゃマズいやね。あんまり大きいハリを使っちゃうとそうなるわけ。

江：だから伊藤さんのは小バリなんですわね？

伊：それだけじゃないけど、別にそう捉えてもいいよ。

江：「小さい食い頃のエサ」を付けるってところが

ら考えても、大きいハリは必要ないんですもんね。一般的にはそういうギリギリのエサつてのはハリを大きくして持たせるわけですけど、伊藤さん達はまん丸く丁寧に付けるのと、「フリースタイル」でなんとかもたせるぞ、と。

伊：丁寧と手探みを混同しないようにね(笑)。それとさっき言った「引っ張りのバランス」を、ここでもあてはめて考えてみて欲しいんだよね。大きなハリと重いエサつてのは同じ事にならない？ なるべく細いトップで釣りたいんだからね。

江：なるほど！ 僕の場合は、さっき言いましたけどハリなしで付け根ちょい沈めなんです。で、「入り込みのスピード」をよりゆっくりにするために、上がる力を最大限残そうとするにはどうしたらいいかを考えると、小バリになるってことだったんです。エサ落ちがなるべく下に「なる」ようにしたいってわけですよ。

伊：でも俺のエサ落ち目盛よりは沈んじゃうよね。オイシイ部分が潜っちゃうわけだ。もつたない(笑)。俺のは「なる」んじゃないかと、「する」んだからね。エサ落ち目盛を先に決めるの。というより、俺のやり方が「普通」なんじゃないの？ それとも古いのかな(笑)。

江：どうでしょうか(笑)。僕の周りの若いコ達は結構気にしてますよ、ハリなしを。でもナジませる釣りの人が多いんで、あんまり入り込みのスピードは気にしてないからかも…。

伊：そうかあ俺、古いんだな(笑)。でもさ、江成君の気持ちは良く分かったけど、「入り込みのスピード」と「見やすさ」のどっちを取るの？ ってことですよ。へらの都合と人間の都合、どっちだ？ って話だよ。

江：もちろん「入り込みのスピード」ですよ…。「慣れ」で克服出来るなら、人間側が譲歩するのは当然ですから。実はその1、2目盛での大きな差つていうのは実感済みなんです。トップの先っぽが折れると、エサ落ち目盛って余計に出てくるじゃないですか。その時はまたまトップ付け根くらいになっちゃうんでしたね。そしてたよくアタるんですよ(笑)。受けていても入っていいっちゃうってのが明らかに減つたんです。伊：どう？ そんな江成君に面白い話をしてあげようか。ナジミ込みを広いストロークで見る

競技派からのんびり派まで、すべての釣り人に使って欲しい…

へら浮子 **杉山作**

浅ダナスタイル
【パートⅠ・パートⅡ・ワイド・ムク】
(各1本4,500円)
フリースタイル
深宙スタイル
(各1本5,000円)



取り扱い店〈五十音順〉

- 埼玉・越谷 かわせみ (☎048-969-5067) 茨城・下妻 こやの釣具 (☎0296-44-1619) 東京・渋谷 サンスイ川釣り館 (☎03-3499-5025)
- 埼玉・入間 三水堂つり具店 (☎042-964-2093) 栃木・益子 フィッシングハウスほその (☎0285-72-2215) 神奈川・川崎 鮎仙人 (☎044-287-7470)
- 東京・吉祥寺 丸勝 (☎0422-22-8923) 東京・青梅 吉川釣具店 (☎0428-22-2467)

ためにムクトップを使うって話をさっきしてたよね。でもムク使いの名人の中には、ハリなしじゃなくってハリをつけたエサ落ちバランスをトップの付け根でとってる人が結構いるみたいだよ。江：マジですか！ ハリなしとエサ落ちの差の広さがムクのキモだと信じて疑わなかったですよ。今はそうなんですか！

伊：いやいや、みんながみんなって訳じゃないと思うけど、なるべくストロークを狭くしようとしてるわけだよ。俺としては、そのところをトップで見ないんだったら、ムクじゃなくてもいいじゃん(笑) って思うんだけど、きつと色々あるんだろ。俺は使わないからよくわかんないんだけど、釣る人は釣るからねえ…。俺が思うに、ムクのウキはトップが細いっていうのが最大のメリットだと思う。入り込みのスピードやストロークって部分はほとんど魅力を感じないね。やっぱりほんの小さな変化みたいなアタリで取っていくような釣りにはいいような気がするよ…。ものすごく早い時には効果があるのかも知れない。もし俺がムクを使うとしたらそんなイメージ。だから「ウキが入っていかないから」っていう理由では使わない。一般的にはコレが一番の理由でしょ(笑)。俺、そんな状態はちっとも怖くないもん。パイプで釣り切ってみせるよ(笑)。

元祖「フリースタイル」。

江：それにしても伊藤さん、ほとんど竿掛け使いませんか。これほどまでとは思いませんでしたよ(笑)。それって誰に教わったんですか？

伊：えっ？ コレ？ うーん、多分、俺のオリジナル(笑)。

江：そ、そうだったんですか！

伊：多分、ね。誰にも言ってないけど(笑)。もしかしら同時期にやり出した人もいるのかも知れないけど、俺の周りではやってなかった。だから誰からも教わってないよ。自分で思い付いたんだ。

江：それは知らなかったなあ…それってものすごく

い功績じゃないですか！

伊：どうだか(笑)…。確かにみんなマネするようにはなったけど。小池さんだって俺のマネだよ(笑)。「おー面白いこと考えたなあ」ってね。

江：たまげましたあ！ 歴史の一頁を作っちゃってるんですよ。そう言えば諸富さん(※小社編集スタッフ)が「フリースタイル」ってネーミングを考えましたけど、気に入ってます？ 僕の「竿送り」とか「ノーテンション」よりセンスいいと思います(笑)。

伊：気に入るも何も、別にいいんじゃないの(笑)？ 俺個人の技でもなんでもないんだから。江：またまた！ ホントに控え目な人なんですからあ！

伊：ノーテンションで思い出した。北城さんの底釣りゼミは面白かったよね。とくに最終回のBBS編では俺も出てたし(笑)。

江：そうなんですよ！ けっこう色々勝手に書いてちゃってすいませんでした！

伊：全然問題ないですよ(笑)。

江：そうですね？ でも多くの読者の方から質問があったように、伊藤さんの釣りとは一見正反対のように見えるかもないですよ。

伊：たしかに俺の底釣りはあんまりズラさないし、フリースタイル(笑)で竿も送っちゃう。それに落ち込みがメイン。考え方の基本は、宙と全く一緒なんだ。でもね、北城さんが言うように「底にあるエサを拾うへらを狙う釣りが底釣り」という前提であれば、やっぱりズラシとテンションの話は何の矛盾もないと思うよ。すごく面白かった。

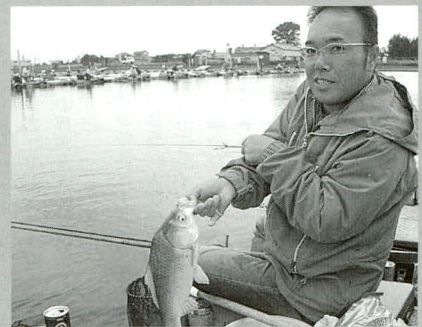
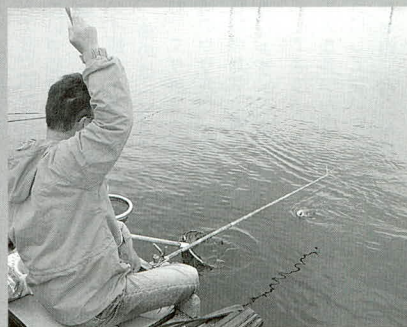
江：そう言ってもらえると嬉しいですよ。…あ、そろそろ時間ですね。来月もぜひよろしくお願います！

伊：こちらこそ。えーっと、次回は西湖だったね？ 釣れるといいね。

江：ええ！

〈オマケ〉 取材風景 (?) in 羽生吉沼 (10月8日)

今回、都合により里ちん不在のため、写真はえなりのデジカメワークに託したが…。案の定、写真点数少なすぎ！ 自らの釣り姿の写真はもちろんなく、伊藤氏の写真が点数のみ…。相当楽しんじゃっていた御様子が目に浮かぶ…



お疲れ様でした…

激寒、曇天、大混雑…と、かなり厳しい条件が揃ってしまっただ日の羽生吉沼。愛好会が行われていた当日、おそろく竿頭は50kg前後。取材2日目のビッグ例会、伊藤洋一は81kgを8尺浅ダナ両ダナゴで叩き出し、優勝している。

取材当日は、曇りで冷え込み、あまり状況はよくなかった。この日も二人は無理ダナと思われる深宙を選択。もちろん両ダナゴで、伊藤15尺、江成17尺。

ちなみに伊藤はリヤンゴが5回(！)あったので、実際は60枚。江成もそれで51枚である



～4回の取材を終えて～ 江成公隆

伊藤氏と並んで釣りをするのは、実は初めてではなかった。何年も前に、西湖で並んで釣った事があるのを思い出した。とはいってもすぐそばというわけではなく、そこそこの間隔を「空けて」の入釣だったので、こんなにくっついて喋りながらというのは初めてだった。だから初回の精進ではとても緊張していた。

会話だけでいえば、4～5回は喋った事があるように記憶しているが、キチンと自己紹介をした憶えがない。なぜだろう…。初めて出会った時に、すでにお互いの事を知っていたということが大きいかもしれない。10年近く前、僕と伊藤氏は同時期に「へら鮎」で連載を持っていた。お互い名前と顔くらいは知っていてもおかしくない。当時たまたま伊藤氏と僕の記事両方を同じ大場編集員が担当していた事もあり、伊藤氏の釣りに対するイメージはおぼろげながらも持っていた。当時、伊藤氏が僕の連載を読んでいたかどうかは不明だし、もし読んでいたとしても「どう感じていたか」も分からない。しかし僕の伊藤氏の釣りに対する印象は、「全く違う釣り」だった。10年前といえば、自分としては最もイケイケだった時期。とくにセット釣りでは誰にも負ける気がしなかった。実際は仲間の大竹君にだけは勝てなかったが、その大竹君と連日深夜まで話をしながら考え抜いた「セット釣りにおける距離感と粒子感、そしてそれらをコントロールする短バリスセッティング」には、絶対的な自信を持っていた。僕らは「がっちりナジませる」からこそ、この理論は生きてくと信じて疑わなかった。落ち込み取りの高速セットなど誰も考えていなかった時代のことである。皮肉にもその短バリスが、落ち込みでのセットを可能にしたのだが。

その当時の伊藤氏と僕の会話の内容についてほとんど思い出せないが、「シブいですねえ」とか、「寒いですねえ」などのどうでもいい会話だったのだと思う。そんな伊藤氏と僕が、初めてまともな会話をしたのが前述した西湖で、北斗へら鮎会の前日試釣の時だった。その日の前浜は大乗っ込みの3日目、それはもうお祭り騒ぎだった。豪快なアタリで延々と続くイレバク。しかし伊藤氏のアタリを見た僕は驚いた。あまりにも小さくソフトなアタリだったからだ。すでに竿をしまつて伊藤氏の釣りを後ろで見ていた夕方、その動きを見た僕は少々不安になった。「渋ってきたのか？」…そう思いながら僕は、伊藤氏にこう聞いてみた。「明日はどうですかねえ？ 乗っ込みももう4日目になるわけですけど…」すると伊藤氏はこう答えた。「うーん、明日へらが出て行っちゃうかどうかは分からないなあ。賭けだね（笑）。でも自分だったらココへ入っちゃうね。だってこんなに状態がいいんだもん。ホラ、空振らないもんね全然。これ見ちゃったら冷静になるのは難しいなあ」。予想外の答えに戸惑った。当時、常にハリスを張らせて釣っていた僕にとっては意外な答えだったのだ。しかし今となっては

理解できる。アタリが小さいという事は、へらがたくさんいたという事なのだ。しかもやる気のあるへらがエサのまわりに密集し、ハリスが張らなかったのだ。そんなエピソードが過去にあったの伊藤氏編。巡り巡ってこのような機会を得ることが出来、なんと不思議な気分であった。

「寡黙な巨星」…里ちゃんが10月号で書いた言葉だが、素晴らしい表現だ。まず自分から語ろうとはしない。これは隠しているわけでも何でもなく、本当に控え目な方だというのは、竿を並べてみてすぐに分かった。氏は優しいのだ。相手を思いやると、余計な事は言えない。そう感じた。それはもしかすると、手取り足取り教えてもらいたいという人にとっては不向きな先生ということになるのかもしれない。もちろん僕もじっくり教わりたいとは思っていたが、黙って待たされるようなタイプではない。口から先に生まれてきたような人間だ。これが良かったのかもしれない。僕が質問すると伊藤氏は、一瞬真剣な表情になる。慎重に言葉を選んでるのはよく分かった。ちょっと間を置いて、そしてちょっと早口で答えを返してくれた。記事の中で氏はかなりイケイケなお兄ちゃん風で登場するが、ほとんど僕の創作と思ってもらって構わない。無口な伊藤氏をよく知る読者の方が、読んでいて何か違和感を感じていたとしたら、きっとそれである。

氏の人生を詳しくは知らないが、以前小耳に挟んだ話では、序列のはっきりした非常に厳しい世界で生きてきたという…。体育会系だろうか。僕は正直そういうのは苦手なので、氏との取材がどういうふう展開されていくのか不安だった。しかしそんな不安はすぐに吹き飛んだ。氏はよく「誉める」のだ。これは意外だった。僕の固定観念では「体育会系の人は誉めない」筈だったからだ。ほとんど自分からノウガキを語らない氏だったが、僕を誉める事だけは積極的だった。アマやかされて育った僕にとって、これは嬉しかった。僕は誉められて育つタイプなのだ。そんな伊藤氏だったが、4回の取材中たった一度だけ、厳しい口調で僕に投げた言葉があった。詳しくは来月号に書いてみたい。

「4回の取材を終えて…」というタイトルで書き始めたこの原稿。もちろん今月で最終回のつもりだった。けれども今さっ書きしたように、どうしても書いておきたい事が少々出てきてしまった。編集長殿と相談してみよう…。

順序が逆になってしまいますが、もしかすると来月は頁が足らなくなる恐れがあるので、予定通りこの言葉で締めくくっておきます。

「伊藤さん、4ヶ月間おつき合いただきまして、本当にありがとうございました。これからもよろしくお願いたします。 えなり」



…いかがでしたでしょうか？
今月号で精進湖で収録された会話は完結。追加取材は西湖、三島湖、羽生吉沼へと続いていったのは御承知の通りです。
えなりが最後に予告した「もう少し書きたいこと」ですが、すでに原稿は里ちゃんの手許にあります。ちっとも「少し」ではありませんしえん（笑）。
来月号は新年号になってしまいうけですが、なんちゃって編集長は両ダンゴの記事にOK出しちゃいました！ 全く記事になっていない追加取材についても、来月号で江成の言葉で語られています。
どうぞお楽しみに…
by 里ちゃん

へら鮎釣りの楽しさを追究し続ける...

へら鮎

Monthly fishing magazine herabuna

No.456
Dec.2003

12



特集II

杉山達也が挑む!

そして...岡田 清が三連覇へ突き進む!

SPLASH BEAT // + *Deep Side Angle*

シマノジャパンカップ2003



特集

秋の涼風に吹かれながら、水郷へ出掛けてみませんか?

佐原向地

PART II

重さ

ナジミ際で、早くヌケさせても、タナをつくれる重さがある。

小林恭之

開き

バラケを早く開かせることで、カラを減らし、下バリへのヒット率を高められる。

岡田清

対応力

ブレンド次第で、ゆっくりバラケるエサにも。様々なセットの釣況への対応力がある。

杉山達也



トップーナメンターのセット釣りは、小さくまとめる、守りのスタイルではない。両ダンゴにも匹敵する、爆発力を秘めた釣りなのだ。この釣りのポイントは、バラケの重さと開き、そして、対応力の幅広さ。トップーナメンターだからこそ、実現できていたこれらの要素を、最初から備え、しかも全開で発揮するのが「セット専用バラケ」。従来のセット釣りでは、考えられなかった強烈な釣果。その荒ぶる性能は、使用者を異次元のセット釣りへと導く。

● **セット専用バラケ ¥700**

硬ボソタイプ (1m~短竿チョーテン)

「バラケマッハ」2+「セット専用バラケ」2
+水1+「軽絁」1

しっとりボソタイプ (1m前後のタナ)

「ダンゴの底釣り夏」1+「セット専用バラケ」3
+水1.5+「スーパー-D」1

無敵の爆発力。攻め抜くためのセット専用。

つれるエサづくり一筋
丸マルキュー

本社・桶川工場 埼玉県桶川市赤堀 2-4 〒363-8509
TEL: (048) 728-0909(代) FAX: (048) 728-3909
大阪支店 大阪府寝屋川市楠根南町12-14 〒572-0811
TEL: (072) 824-0909(代) FAX: (072) 825-0909

四国営業所 香川県坂出市西大浜北3-4-33 〒762-0053
TEL: (0877) 44-0909(代) FAX: (0877) 44-3909
九州営業所 佐賀県鳥栖市姫方町341-8 〒841-0023
TEL: (0942) 82-0909(代) FAX: (0942) 83-0909

<http://www.marukyu.com/>

釣り場でエサに困ったらiモード・ホームページ <http://www.marukyu.com/i>

